

# 岐阜県恵那市山岡町地区における景観特性と景観まちづくりワークショップの成果\*

## The landscape characteristics and the result of landscape workshop in Yamaoka of Ena city\*

岡田智秀\*\*・横内憲久\*\*・朽木健二\*\*\*・島田かおり\*\*\*・川島正嵩\*\*\*・大西 慧\*\*\*  
By Tomohide OKADA\*\*・Norihisa YOKOUCHI\*\*・Kenji KUCHIKI\*\*\*・Kaori SHIMADA\*\*\*  
Masataka KAWASHIMA\*\*\*・Kei ONISHI\*\*\*

### 1. はじめに

岐阜県恵那市では、平成16年に旧市内8地区と周辺5地区が合併し、13の地区で構成される新恵那市として生まれ変わった。これに伴い、平成20年より新市内の各地区の自立と連携を主眼に据えた「恵那市景観計画」を策定することになった（平成22年度策定完了予定）。その対象範囲は市域全体とするが、さらに各地区は地域構造が異なることと、各地区固有の地域資源を活かした地域的自立と連携を促すとの基本目標があることをふまえ、地域別景観計画もあわせて策定することになっている。

この地域別景観計画は、各地区の地域特性に留意することはもとより、複数の地区を貫く水脈や道路や鉄道を活かした計画内容とすることで、隣接地区が相互に魅力ある風景として地域的につながり合うという地域連携型の景観計画を目指している点に特徴をもつ。このため、その策定作業の初期段階としては、相対的に人口が集中する複数地区を明知鉄道が貫くという点で地域連携が促進しやすいとの観点から、明智町地区、岩村城下地区、岩村富田地区、山岡町地区の4地区を先行的に取り上げ、その後順次、他地区の策定作業も進めていく方針である。

こうしたアプローチは、今後、複数の地区をつなげ合う地域連携型の景観計画策定に取り組もうとする他都市に対しても多くの示唆を与えることができると考える。

そこで、本稿では上述した4地区のうち、筆者らが参画する山岡町地区を対象に、その地区を成り立たせている景観構造とともに、それを踏まえた景観まちづくりワークショップの成果について論及する。

### 2. 山岡町地区の概要

当地区は、岐阜県の南東部に位置し、恵那市内では恵南地域のひとつに数えられる、人口4,963人（H22年4月1日現在、市内第5位の多さ）、地区面積60.96km<sup>2</sup>（市内第6位の大きさ）をもつ町である（図-1）。地理的特徴として、西部で瑞浪市と接し、市境に小里川ダムを有し、町の中央を小里川と明知鉄道が貫いている（写真-1）。

その鉄道駅には、山岡駅とともに、駅前に温泉施設を有する花白駅の2駅がある。

気候は冬季における昼夜の大きな寒暖差が特徴であり、その気候を生かした寒天製造は有名で、細寒天生産量は日本一を誇る。また、良質の陶土も採取できることから陶業も盛んであり、これら寒天製造業・陶業と農業を合わせて山岡町の三大産業となる。

地域構造としては、明瞭な中心性をもった集落がなく、小・中規模の集落が点在するという「拠点分散型」のまちであることが大きな特徴とされている。

このように集落が広域に分散する山岡町は、かつて町の東部「遠山村」（田沢、馬場山田、久保原、上手向）と西部「鶴岡村」（下手向、釜屋、原、田代）に分かれていたが、昭和30年の合併でひとつの町を形成するに至った。

そこで、こうした地理的特性をふまえ、山岡町景観まちづくりワークショップでは、東地区と西地区の別に景観資源を発掘する取り組みからスタートした。



図-1 山岡町概略図



写真-1 山岡町中心市街(明知鉄道と山岡駅周辺部)

\* キーワーズ: 景観特性, 景観ゾーニング, 景観計画, 地域交流

\*\* 正会員・工博・日本大学理工学部

(千葉県船橋市習志野台 7-24-1、TEL:047-469-5427、

t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp)

\*\*\* 学生員・日本大学大学院理工学研究科

### 3. 山岡町地区における地域別景観計画策定の取り組み

恵那市景観計画策定の取り組みは、恵那市をはじめ、前述した4地区の各地域振興事務所および早稲田大学

(佐々木葉教授、景観・デザイン研究室学生)、岐阜大学(出村嘉史准教授、地域システム研究室学生)、京都大学(山口敬太助教、景観設計学研究室学生)そして筆者ら日本大学(ウォーターフロントデザイン研究室)で進めている。この特徴として、各大学間が連携して担当地区を振り分けており、本稿で対象とする山岡町は、早稲田大学と筆者ら日本大学で取り組んでいる(表-1)。

また、4地区共通の取り組み事項としては、行政・住民・有識者(大学メンバー)が一同会して共通の論点で当該地区の景観計画について議論を行う“景観まちづくりワークショップ”を展開している。

特に上述したように、山岡町は集落が広域に分散していて、住民共通の風景観が育みにくい地理的状况にあることから、ワークショップ形式の景観計画策定作業は、山岡町内の住民が一同会し、共通の目標像を導出するという点で合理的な手法であると考えられる。

### 4. 山岡町景観まちづくりワークショップの成果

当ワークショップは、昨年(平成21年)10月を初回として、これまでに全4回を実施しており、各回の目的や成果は表-2に示すとおりである。

表-1 地区別ワークショップの大学メンバー構成

地区名	担当する大学連携チーム
山岡町	日本大学、早稲田大学
明智町	早稲田大学、岐阜大学
岩村町富田	京都大学、日本大学
岩村町城下	岐阜大学、京都大学



表-2 山岡町景観まちづくりワークショップの各回の目的・成果等

■実施回/実施日 →WS目的	主な成果(概略)
■第1回 H21.10.10(日) 13:30～17:00 →景観資源抽出	・東西の地区別に地元住民が挙げる景観資源抽出 ・東と西それぞれの地区で景観資源に差異があることと、相手方地区の景観資源に対する認識不足などが明確化
■第2回 H21.11.3(祝日) 13:30～17:00 →地域交流型まち歩き	・東西の地区別に地元住民が設定した景観体験モデルルートを構築 ・上記のモデルルートを通じて、相手方地区のまち歩き体験実現 ・相手方地区の景観資源把握
■第3回 H21.12.5(土) 13:30～17:00 →景観形成アクションプラン	・山岡町全体(東西共通認識)でみた「大切にしたい風景」の抽出(写真投票) ・「大切にしたい風景」を維持向上させるためのアクションプラン討議
■第4回 H22.2.20(土) 13:30～16:00 →景観計画素案評価	・アクションプランの実現化方策(大目標、小目標、標語の導出) ・WSをもとに作成した山岡風景絵図のお披露目

この成果において、山岡町ならではの特筆すべきものは次のとおりである。

- ・東西の別に住民が認識する風景観が異なっていること。
- ・しかし住民の意向としては山岡町景観計画を東西一体で取り組みたいとする方針が明確化したこと。
- ・そのため、東西の別に地域交流型のまち歩きとそのため地元住民おススメ景観体験モデルルートが設定できたこと。
- ・さらに「洞(ほら)」と呼ばれる集落単位で山岡町の文化・コミュニティや景域が形成されていることが把握できたこと。などである。

なお、この山岡町景観まちづくりワークショップの具体的な展開内容や工夫点・課題等については、当発表会の他稿で筆者らが紹介しているので、参照されたい。

以降では当ワークショップ成果から導いた山岡町景観計画(素案)の内容を中心に論及する。

### 5. 山岡町地区景観計画(素案)の特徴と景観特性

#### (山岡町の大切な風景・大切な場所の明確化)

#### (1) 山岡町地区景観計画を構築するうえでの課題

上述したワークショップ成果をもとに、当景観計画を構築するにあたり、次の2点が課題となっていた。

- ・集落が広域に分散する地理的状况にあつて、当地区の景観計画ではどのように町全体を捉えていくか。
- ・東西それぞれの住民の風景観が異なる現状において、当地区の景観計画でどのように住民意識をつなぐか。

#### (2) 課題解決のための現地調査の実施

上述した2課題を解決するために、ワークショップ参加者から挙げた意見や景観資源等を大学メンバー内で再度整理しなおし、各景観資源の地理的分布状況ならびにそれらが印象深く眺められる視点場を発掘するために、現地調査を実施した(表-3)。その実施に際しては、現地に詳しい地元住民1名にも同伴いただいた。その結果、次のような景観特性が明らかになった。

#### (3) 山岡町地区の景観特性

ワークショップで挙げた意見を整理すると、山岡町の東西両端には、東に「明知鉄道と山岡・花白駅・飯高観音」、西に「おばあちゃん市」という当地区の一大

表-3 調査概要

調査日時	平成22年1月30(土)～31日(日)/両日9時～16時(晴天)
調査員	日本大学メンバー(教員1名、学生4名) 現地同行者:花白地区在住山口岳志氏
調査方法	・自動車を利用して、車内から移動風景をビデオ撮影。 ・WSで挙げた景観要素については、当該要素を印象深く眺められる場所でその都度停車して静止画を撮影。 ・WSで挙げた「洞」の重要性を確認するために、地形図を用いて洞地名を特定し、各洞集落を踏査。
調査対象範囲	山岡町全体(国道363、県道33号ほか)



## (5) 景観特性格ゾーンの設定

### a) 明知鉄道沿線景観ゾーン

山岡町東部に位置するこのゾーンは、その中心を明知鉄道が通り、その鉄道駅として山岡駅と花白駅が存在する。山岡駅は、今後推進される「明知鉄道おもてなしプロジェクト」の拠点として、また花白駅は恵南唯一の“駅前温泉”として、両駅いずれも当地区の玄関口（まちの顔）となりうる魅力を有している（写真-2,3）。

またこのゾーンには、明知鉄道から直接見えるものではないが、恵南を代表する荘厳な寺社「飯高観音」（写真-4）も有しており、山岡駅・花白駅とあわせて、これら3つが山岡東部の三大拠点となる。

さらに、既述したように、明知鉄道そのものの眺めが地域の風景として馴染みがあると同時に、不特定多数が乗車することで“公共視点場”ともなりうる明知鉄道の車窓からは、山岡町を代表する寒天業をはじめ、洞的集落の生活景、鉄道・小里川・道路という軸的空間が重なり合う楽しさもまた堪能できる。

こうした空間的・景観的魅力を有する「明知鉄道沿線景観ゾーン」は、山岡・花白両駅周辺景観整備とともに、明知鉄道を視対象および視点場としてそれぞれ捉えた際の沿線景観整備が求められ、これらは、来訪者へのおもてなし、地元住民の誇りの醸成という両面で重要な取り組みとなる。

### b) 小里川沿川産業・生活景ゾーン

このゾーンは、山岡町の中心部に位置しており、当地区の東端拠点である山岡・花白駅と、西端拠点である“おばあちゃん市”（写真-5）をつなぐ重要な軸となる。

このゾーンの特徴は、山岡町の空間的骨格のひとつとなる小里川を近景として捉えられるとともに、その沿川で展開される寒天製造業（写真-6）や陶業（写真-7）といった山岡町を象徴する産業景観ならびに洞的集落が有する生活景が体験できる。いわば、“山岡の日常の暮らしの顔”がそのまま垣間見えるゾーンといえよう。

### c) 洞街道沿道生活景ゾーン

山岡町地区の北部に位置するこのゾーンは、自然地形に囲い込まれた複数の洞集落の生活景が対象となる。

その特徴として、それぞれの洞には明確な洞地名が付されているとともに、各洞集落の生活景はそれぞれ異なる情緒を有している。このゾーンには、各洞集落を貫く一筋の集落内道路が敷設されていることから、その沿道から多種多様な洞集落の生活景が楽しめる（写真-8～13）。その一筋の道を“洞街道”と命名し、当ゾーンの主要視点場に位置づけたい。

### d) 里山生活景ゾーン

このゾーンは山岡町南部に位置し、洞地名こそ付かないが洞集落同様、里山に囲まれた複数の谷戸状の洞的集落の生活景が体験できる。

このゾーンの特徴は、洞的集落群の高台に道路（一部の東海自然歩道含む）があるので、その沿道を視点場とすれば、各集落を含む田園風景と低地に広がる山岡中心市街を一体とするパノラマ景が楽しめる（写真-14）。

### e) 産業景観ゾーン

山岡町地区の代表産業のひとつである陶業において、製品の材料として欠かせないのが陶土である。この陶土の採掘場は町の南西部にあり、その現場の様相は地元住



写真-2 駅前温泉「花白駅」



写真-3 山岡駅周辺の小里川・里山・農地



写真-4 東の拠点の一つ「飯高観音」



写真-5 最大拠点「おばあちゃん市」



写真-6 小里川沿いの寒天干風景と里山



写真-7 小里川沿いの陶業風景



写真-8 洞街道沿いの巨大なボタ(畔)



写真-9 恵南では珍しい石積みボタ



写真-10 集落の個性を伝える石燈籠



写真-11 洞集落を見守る墓地



写真-12 洞街道から一望できる遠景山並



写真-13 トレセンから一望できる山並

民が“山岡のグランドキャニオン”と称するほどの壮大さである。この採掘場は丘陵地にあり、その高台には湧水が落ちる滝を有し、その湧水が旧採掘場に貯留した池の色は鮮やかなコバルトブルーである（写真-15）。こうした要素が一体となった現場の姿は、あたかも独特の庭園的風景を醸し出し、観光資源としての価値を十分にそなえていると思われる。

さらに、かつて採掘現場になったことから消失した緑を住民らの手によって回復させたセルフビルド型の旧採掘場もあり（写真-16）、その現状は旧採掘場であることを感じさせないほどの見事な緑の回復ぶりを見せている。こうした住民の手によるセルフビルド型の自然回復空間も話題性十分な魅力をもっている。

以上のように、このゾーンは“山岡のグランドキャニオン”として親しまれる現役の採掘場をはじめ、湧水の滝とコバルトブルーの溜池を有する旧採掘場、セルフビルドによる自然回復空間としての旧採掘場など、多様な産業景観をそなえている。

#### f) 山岡駅周辺ふるさとと景観ゾーン

一般的に“駅”はまちの玄関口となることから、その周辺の風景はいわば、“まちの顔”ともいえる。特に山岡駅周辺は当地区の空間的骨格である「小里川」と「明知鉄道」をはじめ、農地や里山が広がり、眼前には地場産業である寒天倉庫を有し、さらにはイワクラ公園の丘陵がアイストップとなって領域感あるのびやかな風景が立ち現われている（写真-17~19）。そうしたのびやかな小里川沿いの農地を歩いていけば、平地ながらも山びこがこだまする場に出会い、そこには柿や栗や夏ミカンといった実りの風景が楽しめる場もあり、そこから駅周辺に戻る途中には牛を間近に見ることができる牛舎もあつたりと、まさに「山岡のふるさと」が徒歩圏内で堪能できる（写真-20,21）。

一方、山岡駅にほど近い高台のイワクラ公園に足を運べば、山岡駅と中心市街とともに、その中央を貫く小里川・明知鉄道・主要道といった軸的空間が三位一体となって眺められ、それらを取り囲むように丘陵地が背景



写真-14 洞的集落と市街地の一体的眺望 写真-15 陶土採掘場と鮮やかな色の溜池 写真-16 住民が復元させた旧採掘場の緑 写真-17 ススキに浮かぶ明知鉄道



写真-18 駅前のアイストップイワクラ公園 写真-19 駅前のふるさとの顔「小里川」 写真-20 秋の実りに喜ぶ学生メンバー 写真-21 山岡駅にほど近い牛舎

	1/50 (ディテール、テクスチャレベル)	1/100 (構築レベル)	1/500 (敷地レベル)	1/1,000 (まちなみレベル)	1/2500 (地域レベル)	1/15,000 (情報レベル)	1/15,000~ (地形テクスチャレベル)
概念図							
地形							
自然							
生物							

図-4 「山岡風景カタログ」のサンプル(一部抜粋)

としてそなわっている(写真・1)。その丘陵地には旧山岡小学校跡(現・アイカ電子敷地)を記憶として刻む、当小学校のシンボルツリーであるメタセコイヤがアイストップとして空間を引き締めている。

このように、このゾーンは“川・鉄道等の軸的景観”や“里山・丘陵等の領域的景観”をはじめ、“農業・寒天業といった産業景観”、“小学校跡地の記憶の風景”そして“実りの風景”など、山岡の玄関口にふさわしい「ふるさとの景」が満喫できる空間である。

## 6. 山岡町風景カタログの意義と特徴

以上のように、山岡町には多種多様な景観資源が存在することをワークショップと筆者らの現地調査によって明らかにできた。

しかし、こうした魅力的景観資源も現状の無防備のままでは宅地開発や農地整備等によっていつしか喪失されてしまう可能性も否めない。

そこで、将来的に新たな開発・整備が発生しても、こうした山岡町の景観資源の魅力を維持していけるように、各種景観資源を「山岡町風景カタログ」として景観計画の中に明確に記録しておくことが重要になる。

その特徴は、「残していくべきもの」と「改善すべきもの」のそれぞれにおいて、ディテール(素材、テクスチャ)レベルのものから敷地レベル・地形レベルまでといった「空間スケール」の別に実際の景観要素を写真によってビジュアルに記録しておくものである(図-4)。

このように空間スケールの別に景観要素を整理することで、開発・整備の規模に見合った景観保全・景観形成方針が講じられよう。

## 7. おわりに

恵那市景観計画において、地域別景観計画のひとつに位置づけられる山岡町景観計画では、集落が広域に分散し、町の中心性に乏しいという地理的特性をどのように捉えるかが大きな命題となった。この点につき、景観まちづくりワークショップを通じて、東地区と西地区で住民の風景観が異なる実態が明確になるなか、山岡町景観計画はひとつにまとめたいたする住民の意向を契機として、当地区の景観資源の共通認識を育む取り組みを実施し、さらに広域にわたる景観資源を統合し、つないでいく手立てを導いた。その具体的手立てとプロセスを示したものが図-5である。プロセスとしては大きく6段階に分類でき、各段階を通じてみると、主要な取り組み事項としては13の事項になった。こうした取り組みは同様の地理的特性をもつ地域で援用され、豊かな景観まちづくりが実現していくことを期待したい。

【謝辞】本研究を共同で進めてきた本学学生首代佑太氏、また山岡町景観まちづくりワークショップを共同であった、山岡町住民・市職員・㈱プランニングネットワーク・早稲田大学佐々木葉教授・同大学学生の皆様へ謝意を申し上げます。



【凡例】○数字: 重要な取り組み事項、→: 成果、\*: 今後の取り組み方針

図-5 集落分散型広域地域として捉えた景観計画の策定作業プロセス